

哲学研究者の多様なキャリア形成を実現するために
—学会に求められること

講演者(講演順):

加藤紫苑(株式会社青土社)
濱本鴻志(一橋大学大学院、
ペイン・アンド・カンパニー)
田代伶奈(FRAGEN代表)

企画・司会:

高萩智也(慶應義塾大学)
内山真莉子(法政大学)

1. 開催の背景・目的

初期キャリア研究者支援ワーキンググループが主催する本ワークショップのねらいは、多様な初期キャリアの過ごし方を、学会全体で考えることである。

哲学研究者としてのいわゆる「初期キャリア」は肉体的・精神的に過酷であり、経済的・社会的な不安定さを必ず伴うと思うしまう人は、もしかすると必要以上に、これまでの価値観に捉われているのかもしれない。研究者のキャリアは多様化しており、大学に終身職を得ることだけが研究者としての唯一の“正解”というわけではなくなってきている。それに伴って、初期キャリアの過ごし方も多様化しているし、より推進されるべきと言えるだろう。私たちは、将来を心配するあまり、毎週のゼミで教員たちの顔色を窺いながら、閉店直前のスーパーで値引きされた惣菜を買い、虫歯の治療を先延ばしにする日々を過ごさなくてもよいのである。

とはいえ、学会という学術活動の中心地がそうした“正解”のみを良しとしている限り、初期キャリア研究者が自由に将来のキャリアを選択することはできない。いかなる形であれ「研究者」という側面を自分のアイデンティティの一つとして持とうとする人にとって、学会で業績を積み重ねることは、必要だからである。したがって、初期キャリア研究者の多様な過ごし方は、本人だけの問題ではない。指導教員や同じ分野の研究者が集まる学会全体で考えていくべき事柄であろう。

多様なキャリアの実現や、そこに向けた多様な初期キャリアの過ごし方を後押しするためには、今後どのような変化が必要とされるだろうか。学会は、誰のためのどのような居場所になっていけるだろうか。このような問いに対して、学会に所属する全員で向き合う必要がある。

2. WS全体の概要

そこで今回、本WSにおいて、実際に多様な初期キャリアを歩まれている三名をお迎えし、ご講演いただくことにした。三名それぞれの初期キャリアの過ごし方について、順番にお話いただき、その後フロアとの質疑応答の時間を設ける。とりわけ、初期キャリアの研究者や研究の道に進むかどうか迷っている大学院生や学部生に参考になる部分が多いただろうが、常勤職にある教員にも積極的に参加してほしい。よりよい(初期)キャリアの多様化を実現するためには学会が何をすべきなのか、みなさんと具体的に考えていきたい。

3. 各講演の概要

3-1. 加藤紫苑

大学時代から専門はシェリング哲学で、現在は出版社で主に『現代思想』という雑誌の編集をしている。普段の業務内容を紹介しながら、学部・大学院などでの哲学研究が人文書の編集業務にどのように生かされ、両者の間にどれほど連続性と非連続性があるのかということをお話する。また青山学院大学で非常勤講師としても勤務しており、研究が「ゆるやかに続いている」という状況にもある。学会活動や研究会との付き合い方については私自身も模索しているところであるが、当日は発表者やフロアのみならずのやり取りを通じて、出版業界とアカデミズムの関わりについてできるだけ具体的なイメージを提起できればと考えている。

3-2. 濱本鴻志

一橋大学大学院社会学研究科の博士課程に在籍し哲学の研究を続けながら、並行して外資の戦略系コンサルティングファームのリサーチャーとしてフルタイムで勤務している。修論提出後の3月から中途採用枠として本格的に就職活動を始め、博士課程1年目の6月に東証プライム上場企業に中途入社し、転職を経て現職に至った。濱本からは話題提供として、「28歳修士卒職歴無し」からのビジネスキャリアの可能性を提示し、フルタイム職と博士課程の両立に関わる諸条件及びtipsを共有したのち、そうした「二足の草鞋」を履く(履かざるを得ない)人々が哲学し続けるために学会組織から出来る支援に関していくつかのアイデアを提案する。

3-3. 田代伶奈

社会のなかで哲学はできるのだろうか？哲学が仕事や社会生活に“役立つ”必要は必ずしもないけれど、わたし自身、哲学的な姿勢や知識がさまざまな場面で生きてると実感することは少なくない。

今回は、大学や学術機構での研究に限らない「哲学すること」の意味や可能性を考えてみたい。長く関わってきた哲学プラクティスの活動や、仕事での哲学の活かし方について共有しながら、みなさんとともに「哲学するとはどのようなことなのか？」「何をもちて哲学することになるのか？」という大きな問いにも向き合ってみよう。